

—— 大都市。

そう言われて、貴方は何を連想するだろうか？

娯楽。企業。公害。仕事。群衆。答えは様々だ。

イナゴの大発生よろしく、ここ数世紀で何倍にも膨れ上がった人類の数だけ答えがある。

一言で答えを言ってしまうえば、同じ答えになる者も数多くいるだろう。

だが、その答えの詳しい意味まで同じになる事は殆ど無く……もつと深い意味をたどれば、誰一人として同じ意味になる者はいない。

だからこそ、私はそれに強い魅力を感じた。

ちなみに、私は大都市という言葉から巨大なコンクリート製のビル群を思い浮かべる。

いわゆる、コンクリートジャングルと呼ばれる都市の

事だ。

だが、私にはアレをジャングルと捉える事が出来ない。私にはどうしてもアレが、隙間無く並べられた墓標にしか見えない。

だから人々は、そんな墓標の、無いような隙間を目ざとく見つけた……小さな小さな蟻の様に見える。

夜も更ければビルは完全に墓標と化す。

生命の気配が消え、黒い墓標が、ただ其処に立ち。

そうなると、昼は多少見上げていた蟻達もこの墓標に興味を無くし、ただ下の方を向いて歩くばかりだ。

だから、気付かない。

墓標と墓標を伝って派手に戦っている彼らに、気付くことはない。

そういう、悲しい運命さだめなのだ。

ビルとビルの隙間、墓標と墓標の隙間の空中を、縫うように飛んでいる。

跳ぶのではない、飛ぶのである。

ネオンがまるで逆さまの星のように瞬き、足元を流れていく。

町の喧騒も、同時にだ。

互いに自分の勢いを殺さぬよう、相手が自分の方向を  
確認する前にビルの分厚い窓を蹴りやり、空中で自分を  
維持するだけの速度をつける。

ネオンが下から降り注ぐ夜景の空の上、ビルとビルを  
伝って夜空を駆けていく。

そんな、常識外れの動きをする男達がいた。

一方は黒のスーツを着、もう一方は紺のチャイナ服を  
着ている。

チャイナ男から放たれた拳を軽く身そる事でかわし、

銃で軽く牽制しながらスーツの男は舌打ちをした。

無気力で醒めた、でも、何処か底冷えするような冷たさを湛えた目をした男だ。

黒いスーツを身に纏い、同じく黒の髪を襟に掛からない程度にバツサリと切り込んでいる。短髪の類ではあるが、髪自体の量は多い。

髪型だけならば、風体に無頓着ならしめない印象を与える。が、男の整った容姿がその印象をおぎなうてあまりあつた。

空中で軽く反転してみせながら、男は思う。

退屈だ。少しは出来るかと思つたが、やはり口だけか……つまらん。

少し、興味を失つて下を眺める。と、地上を歩く人々が蟻の様に見えた。

それも、節操の無い働きアリどもばかり。

男、鴉はそう思い。タバコを口に挟んで火をつける。

あまりにも退屈で、タバコでも吸っていなければやって  
いられない。

対する紺のチャイナ服を身に纏った男は、チャイナな  
男らしく何やら拳法の様なものを操っている。

無論、着ているチャイナ服は拳法家が着る様なチャイ  
ナ服だ。

これがどうして、なかなかカッコイイ。

空中で拳や蹴りを繰り出す様も、惚れ惚れするほど決  
まっている。

だが、所詮は見てくれだ。

「中身が伴ってなきや無意味だな」

そう呟いて、鴉は煙を吐き出した。

流れる景色と共に、吐き出した煙も後ろに流れていく。

常人なら呼吸困難を起こすような行動だが、そこはそれ、  
鴉も常人とは違う。

鴉は眉間に皺を寄せ、考える。

おそらく紅龍会の奴だな、一人で居た所から察するに、  
それなりの実践は経験してきた奴なんだろうが……こ

りや、ヒデエな。

相手の上司の苦勞を思い、苦笑した。

あまりにも、シヨボイのだ。今までの鴉の経験から言  
つて、過去最悪のシヨボさと言える。

「ま、こつちは楽になるから助かるけどな」

そう呟きつつ、鴉は二本目のタバコに火をつけた。

チャイナ男への牽制の射撃と、空中で反転するなどの  
アクロバットを同時に行いながらだ。

余裕である。

「亜羅羅羅々々！」

と、そんな漢字表記の叫びを上げて、チャイナ男の連  
続技が繰り出された。

胴、足、首の順である。

この男、大抵の場合がその順で攻撃してくるのだ。

おかげで、何も考えずとも避ける事が出来る。

アゴを引き、体をえび反り状態にする事によって足と

首を避け、胴は銃身で受け止めた。

鴉はさつきからヤレヤレといった感じの無気力さを

アピールし、チャイナ男への侮蔑の意味も込めて眉を顰めていたのだが、どうも、チャイナ男は鴉の眉間の皺を自分に対しての恐怖か何かと勘違いしているらしい。

さつきから、妙に勢い付いている。

「新人にありがちな思い込みだ」

「破ッ！」

そんな俺の呟きと重なるように繰り出されたチャイナ男の突きを、紙一重でかわす。

無論、わざと紙一重でかわしているのだが、チャイナ男には自分が相手を押している様にしか見えないらしい。時折、ニヤニヤしている。

その顔が、大分気に入らなかつた。

二本目のタバコを吐き捨て、チャイナ男のアゴに強烈な蹴りを打ち込んだ。

「グッ」

という情けない呻き声を上げ、その一発だけでチャイナ男の勢いは削がれる。

予想外の出来事に、チャイナ男は多少戸惑いを覚えた

ようだ。驚愕の表情になっている。

が、予想外だったのはチャイナ男だけではない。鴉にとつても驚きだった。

随分綺麗に決まった。ある程度防がれると予想しての蹴りだったのだが……防御すらマトモに出来ないのか？コイツ。

相手のあまりの拙さに、ほんの一瞬だけ呆となつてしまった。

蹴りの反動を使い、後方に飛ぶ。そのまま、何処か公共の施設の高層ビルの分厚い窓に垂直に着地する。

同時に顔を上げ、チャイナ男を確認して驚いた。

何処で反転したのか、弾丸の様な速度で飛んでくるのを確認できたからだ。

一応、銃で適当に牽制してみるが、速度が落ちる気配は無い。

「へえ、思ったよりやるじゃないの」  
意外な出来事に、鴉は薄く笑った。

\*

殺<sup>と</sup>った！

そう、チャイナ男は確信した。

自分の今までの経験上、この距離とこの速度で回避されることは無い。自分一人で上げる初手柄はもう間違いない。

確かに、速度はのっているし状態も万全、加えて相手は無防備な状態だ。相手を仕留めるのは間違いなかった。

『チャイナ男の経験上』ならだ。

「羅ア！」

気合の掛け声と共に、必殺の鳳拳を叩き込む。

弾丸の様な速度をそのまま乗せたその一撃は、都庁の分厚い窓と共にスーツの男を容易に貫いた。と、思った。

しかし、実際は窓を砕いただけであった。人間を貫いた感触など何処にも無い。

事実、其処にスーツの男の姿は無かった。

一瞬、啞然とする。

すると、自分の下の方で声が聞こえた。

驚いて声の方を向くのと、自分の意識が飛んだのは、殆ど同時だった。

\*

チャイナ男の拳が飛んでくる直前、重力が向かう方向に向かつて軽く飛んだ。

というより、落ちた。

今まで自分の足下で瞬いていたネオンに吸い込まれていく。

落ちながら、チャイナ男が驚いている間に今まで撃っていた銃より一回り以上大きい銃『Crow』を取り出す。

今まで撃っていた銃が連射用なら、コイツは一撃用の破壊力重視の銃だ。

三本目のタバコに火をつけながら、時間を確認する。そろそろ決めておかないと不味いな、下のアリどもが

騒ぎ出す頃合だ。

赤いリムの弾が入ったマガジンと、青いリムの弾が入ったマガジンのどちらかを選ぶか一瞬迷って、鴉は青いリムの方にした。

きつと、あの不愉快なニヤつき顔、こと綺麗に吹き飛ばしてくれるだろう。

両腕で構え、狙いを定める。

「頑張ってくれた後で悪いが、タイムアップだ。そろそろタルイしな」

チャイナ男が気付く。それより少し前に、鴉は打ち込んでいた。

夜の喧騒の音は、中々にうるさい物である。特にココは、最上階付近で色々な音が混じって、何の音か聞き分けられない様な音になる。何故なら、音は上に上って行くものだからだ。

そんな不愉快な音どもが、一瞬完全に消し飛んだ。

耳が機能を取り戻すと同時に激しい炸裂音がして、衝撃が体を走る。

若干のタイムラグの後に、爆音と共にチャイナ男がいた辺りで爆発が起こった。

もう一瞬、音が飛ぶ。

と、その段階で、鴉はミスをした事に気が付き、舌打ちした。

チャイナ男を仕留め損なつたのではない。

チャイナ男のいた辺りは爆煙に包まれていて、普通に視認でチャイナ男の生死は確認できない。

が、それは常人であつたらの話だ。

打ち込んだ弾が、しっかりとチャイナ男の胸部の辺りに着弾したのを鴉は確認していた。

だから、それはミスでも問題でも何でもない。問題は……。

「撃つた後、自分が加速してしまう事を全く考えていなかった」

そうなのだ。この銃は反動がデカイ。しかも、撃つたのは空中だ。上から撃つたのならともかく、下から撃つたのでは地面に叩き付けてくれと言っている様なもの

だ。

「チツ、ここがお空の上だということをしつかり失念していた」

そう言って舌打ちする。

案の定、既にかんりの速度で落下していて、瞬くネオンの光が迫ってくるのが分かった。

なんとかビルに取り付こうと窓に手を伸ばしてみる。が、ほんのちよつと触れただけで、ジジッと嫌な音と共に指先の皮が剥けた。どうも、素手では手がミンチになってしまっただけの様だ。

さっきまでそれなりに安心できる速度で上ったり降りたりしていた景色が、まるで嘘の様な暴力的な速度で上昇している。

いや、上昇しているのではない。鴉が落下しているのだ。

景色の移り変わりにこれほど恐怖を覚えたのは、鴉にとつてもはじめての事だった。

地面に向かって高速で落下しながら唸る。

「クソツ、ニュートンめ！」

ニュートンは法則を発見しただけで、落ちているのは全く彼の責任では無い事は分かっていたが、恨めしく思わずにはいられなかった。

景色は目まぐるしく上昇していく、その速度もあがっていく。

自分を下から押し上げる空気の圧力が、どんどん大きくなっていくのが分かる。

鴉の速度は、重力の法則に正しく従って加速を続けている様だ。

嫌な汗が、鴉の顔を流れずに上に向かって飛んでいった。

このままでは、臓器をぶちまけて死んでしまう。きつと明日の一面に載るだろう。いや、沙羅が揉み消すだろうから三面にも載らないかもしれない。

洒落にもなっていない。

「下見で殉職……勘弁してくれよ」

そう呟き、覚悟を決める。

骨も折れるだろうし、金も掛かるだろうし、明日生きてく金さえ無くなるかもしれないが、死ぬよりはずっとマシだ。

背に腹は変えられないのである。

「南無三！」

鴉はそう叫び、反転しながら左手で高層ビルの分厚い窓を殴った。いや、左手を突き刺したのだ。

「グッ！」

衝撃音と共に、とんでもない力が鴉の左腕、そして全身に掛かった。

形容し難い音を立て、窓を破壊しながら落下していく。その間も、鴉の全身に冗談ではないほどの衝撃がかかってくる。特に、左の肩は半端ではない。

「グッ、がッ——」

声にならない悲鳴が口から吐き出され、左肩に焼けるような痛みが走っていく。

いや、実際問題多少は焼けていたのかもしれない。

「こ、コイツが留め金の気分って奴か！」

多少、見当違いな言葉を鴉は口走った。何か言わなければ正気を保ってられない、と言うことでもある。

鴉がビルに腕を突き刺して一瞬の後、ミンチにならない程度の右手の助勢もあつて、突き刺した地点から5Mほど下の辺りでなんとか止まった様である。

当然のように、鴉は吐血した。

骨も何本か折れたようである。肩も取れたようで感覚がない。

詳しく調べれば、おそらくもつと酷い有様だろう。

左腕の義腕も、折れかかっていた。

関節の辺りからギチギチと千切れていく音が聞こえ、焼けた金属独特の胸焼けする様なおいも漂ってくる。だが、そんな状況でも鴉はこの腕が非常に頼もしく思えた。

左腕が金属製の義腕だったからこの程度で済んだのだ。というか、金属製でなかったら哀れ左腕はミンチになり、自身も潰れた蛙のようになってしまっただろう。

今日ほどこの金属の腕に感謝した事は無かった。



ありがとう金属の左腕。夏場は鉄板みたいに暑くなつて、気を抜いたらやけどするからムカツクけど、とにかく今はありがとう。あと、今後は留め金にも酷使させないように注意しよう。

そんな事を思いつつホツと溜息を付こうとして、もう一度血を吐き出す。

体も義腕も、かなりギリギリの状態であつた。

それに、まだ地上20M以上はある地点である。

「さて、どうしたもんか」

そう呟いた時、頭上から何かが風を切る音が聞こえてきた。

見上げると、さつき爆破した窓の残骸のデカイ奴が、

鴉めがけて落ちてきていた。

「ニュートン、貴様……」

二世紀以上も前に死んでいる相手を、鴉は呪つた。

\*

「鴉、か。これはまた随分と厄介なのが出てきたな」  
件のビルの前、細長いビルの屋上で、白い髭を長々と生やした老人が一人立っていた。

歳はもう老齢に近いもので、元は黒かつたであろう髪も衰え灰色に近い色合いになっている。

しかし、目は爛々とひかり、強い意志を感じさせる。

何より、その老人は年齢とは完全に不相応なほど、見るからに体格が良かった。

髭をさすりながら、老人は溜息を吐く。

「今回はあまり時間をかけている暇も無いというのに……」

懐から携帯を取り出し、ゆっくりと番号を押す。

時折、番号を押す手が震えている。明らかに、携帯電話

話というものに慣れていない様子だ。

モタモタと、手の上で右に左にと携帯電話が揺れ動いている。

慣れない機械の操作に苛つきながら、老人は毒づく。

「ちっ、スイッチが小さすぎるのだ」

携帯のボタンをスイッチと言う辺り、老人の年齢を感じさせられた。

とりあえずは、あつさりとやられた出来損ないの変わりを呼ばねばならん……。

そんな事を考えながら、何度も何度も番号を押し間違えた後、老人はやつと目的の相手に電話する事が出来た。

「阿く、喂喂（もしもし）。私だ、道神だ」  
タオンエン

それまでの悪戦苦闘はなんのその、老人は電話上でも威厳たつぷりに指示を飛ばす。

そんな老人の声は、ビルの屋上まで届いてくる街中の喧騒に溶け込み、やがて消えた。

\*

何も知らずに、這うように墓標の隙間を歩いていた蟻達の動きが止まる。

自分達の目の前に、自分達には理解できない異端が落

ちて来たからだ。

いくら鈍感な蟻達も、さすがにソレに気付かない訳にはいかない。

ソレは。

ある蟻にとつては恐怖そのものであったし、ある蟻にとつてはたかるべき蜜であった。

だが、折角気付く事が出来たのに、蟻達はその恐怖を仲間に伝える事も、蜜にたかつてその味を吟味する事も出来ない。

残り香の様な噂だけが、周辺に漂うばかりで。

大した時が立つ事も無く、誰も重要な所を伝達しなくなる。

恐怖であった蟻にとつては忘れるべき事であったし、蜜であった蟻にはより甘い蜜を手に入れる手段でもあったからだ。

しかし、蟻も量が多い。

それだけならば、小さな波もいざれ大きな波に変わってしまふように、瞬く間に周知の事実となつてしまった

だろう。

では、何故か？

本能とも呼べる領域の意識で、蟻達は知っていたのだ。そうなる事で、自らを守り種を繁栄させる事が出来る。と。

それも一つの、蟻達の処世術なのだ。



—Chapter2 『籠』

「コイツは駄目だな」

河川敷の傍にあるオンボロな修理工場のさらに下のオンボロな工房で、爺のそんな声が無駄に良く響いた。それだけに、嫌な予感を掻き立てさせられる。

「そいつは、どういう意味だ？」

探るような目つきで、鴉は訪ねる。

「どうもこうもそのまんまの意味だ。こりやもう駄目だ。総取替えだな」

あつさりと、それでいて堅い言葉だ。

そんな爺の言葉に軽く眩暈を覚えながらも、鴉は一応聞いてみる。

「高くつくか？」

ボトル入りの酒をグビグビ飲みながら、無表情に爺は言う。

「腕全体の外側がまんべんなく碎け散つとるし、全体的に摩擦による焼け跡」

「……」

「ついでに、手に至つては骨組みすら残つてねえ。それどころか、左腕そのものの軸が折れとる」

ギロリと睨まれた。

何となく、爺から目を逸らす。

「これで、高くつくかも糞も無いだろうか？」

つまり、高くつくという事だ。

それは不味い、それは困るのだ。特に今は。

「あー……どうにかなんねえの？」

鴉は視線を逸らしたまま、横目で尋ねた。

普通なら面子があるのでそんな事は聞かないが、なにせ先立つ物が無い。

「なら、左腕は無しで過ごすこつた」

そう、爺はあつけらかんと言いつつは職業柄無理だ。

脳内で現状を確認すること一分。

顔を手で覆いながら、溜息を付いた。

「分かった。やってくれ」

「あいよ」

爺は飲み終わった酒のビンを投げ捨て、ゲップをひとつかます。

投げられた酒ビンが、綺麗な弧を描いてダストシュートとカタカナで書かれたポリバケツに入り、いい音で割れた。

割れたら意味ねえだろ、と思ったが、黙っておく。

今に始まった事では無い。

爺はまず、予め準備してあった工具類で左腕である義腕を外しにかかった。

接近してくる爺の見事なハゲ頭が、油でテカっているこのハゲでアル中でガタイの良い生臭爺は、その筋の家業の奴らの武器のメンテや改造などを職業にしている奴らの一人だ。

名前を覚えてくれないので、通称は爺で通っている。そんな奴らの中でもこの爺は相当の変わり者で、普通は仲間同士で分業して行う作業を全部一人で行っている。しかも、その辺の奴らよりずっと腕が良く、多少医学にも精通しているらしい……無免許程度に。

だから、義腕の修理なども頼んでいた。

腕は良いから文句はない。文句はない……が、こっちは大金を払う客なのだからもう少し愛想を良くしても罰はあたるまいに……。

と、そんな事を考えつつタバコをふかしてされるままにしていると、爺から声が掛かった。

「おい、軸が折れとるところか砕けとるぞ！コンプレ

ツサーにでも手を突っ込んだのか？」

そう、素つ頓狂な声を上げています。

爺にしては珍しく、本当に驚いているようだ。

「いや、そんなもんじゃ無かったぜ、アレは」

と言つて、鴉は先日の出来事を思い出して身震いする。

アレは久々にヤバかったな、ほんと。

「あー、アレだ。ニュートンだ」

と、爺にとつては全く意味不明な事を鴉は口走つてみる。

「破片が食い込んで取れにくいのお」

爺は顔を顰めながら、そう呟く。

軽く無視されてしまった。どうも、単なる雑音と判断

されたようだ。

苦笑していると、また爺から声がかかった。

「よし、取り外し終わったぞ。後は新しいのと神経を

繋ぐから服脱げ」

取り付ける時は何時間とかかったのに、随分と簡単に

作業が進んでいる。

コレは、ひよつとすると……。

「随分速いな、安く上がるんじゃないかねえの？」

少し期待を込めて尋ねると、爺は鼻で笑つて。

「ただ、取り外すだけだぞ？確かに軸が砕けてたが、

根元は健在だったんだから時間が掛かるわけあるまい。

掛かるのはこれからだ。それに、安くもならんぞ。新し

いのと丸ごと取り替えるわけだからな」

と、俺が聞きたいこと全てを一息で言つてのけて、俺の期待を見透かしたように爺はニヤリと笑つた。

「なるほどね」

そう呟いて、上着を脱ぎながら溜息を付く。

期待とは儂いものだ。

爺は奥の部屋から腕を取り出してドンと自分の手前

の台に置くと、何やら準備を始めた。

スペアを作っておいていたらしい。準備の良い事である。

る。

「じゃあいつちよ、神経を繋ぐかい。麻酔はいらない

だろ？」

そう、真顔で爺は言った。

「冗談キツイぜ、爺さん」

顔を顰め、間髪入れずに言う。冗談では無い。

「分かったわい。麻酔が勿体無いんだがなあ……」

そうブツブツと呟いて、麻酔の準備を始める。心底残念そうだ。

まったく、とんでもない爺である。

器具の消毒なりなんなりし、いよいよ麻酔をと言う時になって、突然爺の手が震えだした。

「お、スマン、酒が切れたようだわい。ちよつと補給してくる。なあに、飲みゃ治るわい」

ガハハツつと爺は照れた様に笑い。手を震えさせながら奥の部屋に向かう。

アル中の、典型的な症状だ。

毎回毎回、この調子で作業の前に手を震えさせるのだ。ヒヤヒヤして仕方がない。

「爺さん、ちつとは酒を控えたらどうだ？体に悪いぞ」  
俺の為にも。

そう言うと、爺さんは珍しい生き物を見るような目をして。

「何寝ぼけた事言つてやがる。コイツは体に良いんだぞ？」

頭は大丈夫か？という顔で爺さんは言ってくる。しかも、本気で言っているから始末が悪い。

爺さんの理論では、酒は飲めば飲むほど体に良いのだ。だから自分は世界で一番健康であつて、肝臓を悪くしたりする奴は飲む量が足りない」と豪語している。

一体どういう理論なのか、根拠を聞きたいものだ。

「こりや、駄目だな」

そう、げんなりとした顔で鴉は呟いた。いつもの事なのだ。

\*

爺による義腕との神経を繋ぐ作業が終わり、新しい左腕が少し馴染んで来た頃。奥の部屋からメガネをかけ、

モツブの様な頭をした青年が出てきた。

バリバリと頭をかきながら、大きな欠伸をする。

鴉をみとめると、手に持っていた銃を掲げてきた。

「鴉の旦那、メンテと修理終わりましたよ。あと、弾のほうもね」

平賀鉄朗、通称テツ坊だ。分かりやすく言うとな爺の弟子の様な奴だ。ただ、弟子と言っても居候しているだけで、仕事は分けて行っている様である。

銃のメンテと弾の仕入れなどはテツ坊、銃の改造や義腕の修理などのマニアックな部門は爺の担当という具合だ。

親とケンカし、大いなる夢を抱いて家を飛び出したが挫折。スゴスゴと家に帰ってきたが両親は既に他界。あても無くフラフラと彷徨っていた所、コンビニで酒をバカみたいに買っていた爺と遭遇。気が合ってそのまま爺の所に居つく。

という、分かりやすい経歴の持ち主でもある。言えた義理じゃないが、ろくな人間でない事は確かだ。

そのテツ坊に、鴉は爽やかに笑って言った。

「スマンな、テツ坊。ツケといってくれ」

その凶々しいを通り越して清々しさまで覚える鴉の言動に、テツ坊は露骨に嫌そうな顔で対応した。

「旦那、またですか？ツケ、かなり溜まってますよ？」

「いいじゃねえか、俺とお前の仲だろ？」

客と技師以外の関係など何も無かったが、鴉は凶々しくそう言うしてみる。

と、テツ坊はもう諦めたかのように軽く肩をすくめて。

「分かりましたよ。どうせ出す物も無いんでしょう？でも、次こそちゃんと払ってくださいよ。このデカブツの弾とか馬鹿にならない位金かかるんですから」

と言った。

確かに、片方は爺が市場に回収っている奴を改造しただけの物だから、そこまで弾に金は掛からない。が、デカイ方『Crow』は四十五口径のハンドメイド品だ。

しかも、標準の赤いリムの弾でさえタングステン弾使

用の増薬弾。<sup>マグナム</sup>青いリムの弾にいたっては、炸裂弾なので

爆発するように信管まで準備しなくちゃならない。

そちらも辛いだろうが、こっちも払うのは辛い。

「ああ、払う払う」という感じで適度に相槌を打ちながら、以外と何とかなるもんだなあ」と

鴉は思う。

その勢いのまま、爺に言った。

「じゃあま、そういうことで、こちらも一つツケって事でよろ……」

よろしく。と言い終わる前に、バリントツという良い音がして頭から酒まみれになった。

爺が、持っていた酒ビンで鴉の頭を殴ったのだ。

「調子にのってんじやねえぞ小僧。まさかテメエ、金払わずに帰る気じゃあるめえな？」

目が据わっていた。

「……」

黙って懐から札束を取り出し、渡す。

「あ！旦那、金持ってんじやないですか？こっちも払ってくださいよ」

さつき誤魔化したハエが、後ろでブンブンと五月蠅い。

「馬鹿、男に二言は無いんだぞ？お前も男なら、自分のいった言葉には責任を持てよ」

「そういう問題じゃ……」

そのままテツ坊とちよつとした口論になろうとした時、爺の声が割って入った。

「ちよつと足んねえぞ」

容赦ない一言だった。鴉はさつき酒で消えてしまったタバコをにじりながら言う。

「サービスしてくれよ。マジでそれでオケラなんだ。

もう今日飯食う金も残ってねえ」

「ふん、知るかい。次に来た時に払ってもらおう」

そう言って、爺は金を直接作業用のポケットに突っ込んだ。

鴉は大袈裟に肩をすくめてみせる。

「厳しいね」



「アホ、こんなに優しい事があるかい。手前の恋人を質に入れられないだけマシと思え」

それは、困る。商売が出来ない。確かにそれよりはマシだ。

「分かった。感謝するよ」

ヤレヤレという感じでそう言つて、テツ坊から受け取つた恋人を懐に入れる。

「金払つてくださいよ」というテツ坊の言葉を無視し、爺のオンボロな工房を後にした。

\*

雲一つ無く、飛ぶ鳥の様子がよく分かり、空に影法師が作れそうなほどである。

そんな晴れ晴れとした、日本晴れと言つても良いほどの快晴のその日。日本のとある国際空港の正面玄関は、非常にざわついていた。

なぜなら、ある一人の男がその空港に降り立ったから

である。

「Fu〜む、Excellent!素晴らしい。コレが日本の空気が德斯 Kai

男は、英語と日本語を織り交ぜた非常に滑舌の悪い言葉を操りつつ、胸一杯に空気を吸い込んで感嘆の溜息を付いた。

男は特に気にする様子も無い（もしかしたら気付いていないかもしれない）が、周囲の視線は間違いなくその男一人に注がれていた。

よくある、チラチラと伺うような目線ではない。誰もが少しもチラつく事無く一直線に、男に視線を集めていた。

明らかに奇異の目を向ける者もいれば、打ちのめされた様な顔で見ている者もいる。

大分怪しい混ぜ言葉はともかく、このような滑舌の悪い日本語を使う外人は珍しくないし、ここは国際空港である。外人自体が珍しいなどという事は無いはずだ。

だが、周囲の視線は間違いなくその男に注がれている。

日本人だけでなく、外人の視線もだ。

問題は、男の風貌にあった。

髪は金髪のロング、オールバックにして後ろで纏めてあり、色が薄めのサングラスをしている。上は『柳生』とデカデカと印刷してあるシャツに、背中に昇り龍の刺繍の付いたスカジャン。下は馬鹿みたいに広い裾のGパンに、草履。

何より、ベルトに大小の日本刀が差してあった。

何か勘違いしているとしたか思えない、通報してくれと言っている様な格好だ。

これでは注目されるなど言う方が無理だ。そもそも、腰に日本刀を差してどうやって税関を通り抜けたのであるのか？

男はそんな自分の格好も周りの視線も気にも留めず、それとはまったく別の事で困っていた。

しばらくブックマップを読み、唸る。

「Oh……、東京都内の何処にも、江戸という place が有りません。そこに行けば柳生もあると思ったのデス

gai

「困りました Ne」と男は呟く。

サングラスをしているので、どんな顔で言っているのかはよく分からない。が、恐らく本気で言っているのだろう。

そうして男は盛大に肩を竦めると、大きく溜息を付いた。

「柳生の発祥の地には是非行きたいの Ne」

懸命な人なら当然分かっていると思うが（というか、当たり前だが）、東京には江戸という地名など勿論無い。恐らく、柳生も無いだろう。従って、男が探しているような場所など当然無い。そもそも、柳生の発祥の地は江戸じゃあ無い。

「オカシイです Ne。私の魂スピリットの聖書によると、間違

いなく東京都内に江戸という place が有るのデス gai

そう言って、男はスカジャンの懐から一冊の本を取り出した。

表紙には屈強な顔をした男が日本刀を抜き身で構えており、それに被さる様に題名『Great! 柳生十兵衛』の文字が書いてあった。

今、メリケンで大人気（そっちの界隈で）のコミックだ。

「ホラッ、三巻第十四話。柳生の地は東京都江戸にアリ、とこう記されてイRu」

男は何度も何度も同じ部分、「柳生の地は東京都江戸にアリ」を読み返す。

男なりの確認方法なのであろう。

十回ほど繰り返した後、男は誇らしげに言った。

「OH!やはり間違いありません。この場所、東京に柳生は間違いなくアリまーSu-」

男が現在降りたっている場所、それは『新東京国際空港』であって東京ではなく千葉なのだが、男にとってどうでもいい問題だった。

とりあえず、東京という名前が付いていれば良いのだ。

男はもう一度ブックマップ眺め、首を傾げる。

「Fuむ。地名が小さすぎて載っていないのカNa。」  
そう呟き、そのブックマップをゴミ箱に捨てた。目的も載っていない不良図書は必要無いのである。

「ま、なんとかなるDeシヨ」  
それが男の持論であった。

一陣の風が吹く。良い具合の、爽やかな風である。

だが、男はその風に何やら不穏な物を感じたらしい。不敵に鼻を鳴らして言う。

「この日本の地も、何やらJustice<sup>正義</sup>を必要としている

気がします」

そう言つて、軽く笑う。正義を必要としているならば、それは自分が必要とされているという事に他ならないからだ。

ベルトから刀を鞘ごと抜き、一度立ててから手を離すと、刀は男の前方、やや右斜めに倒れた。

「向こうですKa」

特に何も無い、ただの駐車場である。

だが、男は何やら幸先の良い物を感じて意気揚々と歩き出した。

男の、正義の進撃が始まったのである。

ちなみに、この時既に通報を受けた警官が男のすぐ背後まで駆けつけていた事は、もはや言うまでも無いだろう。

\*

爺の工房から30分ほど歩いて行つたところに繁華街がある。

地方の繁華街としては珍しくそこそこ栄えているように、割と利用している人が多いのが特徴だ。

上げるべき特徴が、その位しか無いという意味でもあるが。

その食品外を突っ切つて裏手に回り、ソープや風俗店が立ち並ぶ通りも突っ切る。

おっと、忘れていた。

この辺りは何故か風俗店の取締りが緩く、なかなか良い仕事ぶりをしている店が多いのも特徴であった。だから、割と人が多いのかもかもしれない。

「そーいや、夜になると男しか歩いてないしな」

近所に公立の高校が建っているというのに、不健全な事だ。

「まあ、文句は無い」

鴉も、羽振りが良い時はよく女を買いに来ているのだ。そんな事を考えながらその地帯を突っ切り、さらに寂れた場所に出る。

この辺りは古参の店が多く、色々とこだわっている時々驚くほどの発見や収穫があつたりする場所だ。かといつて店の主人は儲けなどどうでもいいという奴が多く、知る人ぞするという場所でもある。

そんな場所に、目的の店、喫茶『無道』も立っていた。

カラント、という昔ながらの良い音と共に扉を開ける。中は、昔ながらの喫茶店の雰囲気をも少しですれトロな店内になっている。

単に古いだけだ。

「いらつしやい」

と、愛想のいい声でこの店の店主、沙羅が笑顔で出迎えてくれた。とろける様ないい笑顔だ。

「よう」

と、鴉も笑顔で挨拶をする。

が、沙羅は鴉の姿を確認するなりガラリと態度を変えた。

さっきまでの愛想の良い笑顔が嘘のように消え、醒めた目を見せる。

「今日はもう閉店よ」

そう言つて、沙羅は店じまいを始めようとする。だが、鴉は無視してカウンターに座った。

沙羅は眉を顰める。

「あんた……よくノコノコとこの店に来れたわね？随分と面の皮が厚いんじゃない？帰りなさい」

そして、犬でも追い払うかの様に手をヒラヒラさせる。今日はいつにも増して酷い。

鴉は軽く肩を竦めた。

「おいおい、そりゃあねえだろ。俺は客だぜ？スマイルくれよ、スマイル」

「……」

そう言うと、沙羅は無言でカウンターの引き出しからそろばんを取り出した。そのまま凄いい勢いで弾き出し、弾き終わったそろばんを見せてくる。

覗き込む。そろばんはよく分からないが、とんでもない額だという事は鴉にもよく分かった。

「コイツは？」

「相場」

笑顔の相場らしい。思わず、鴉は吸っていたタバコを落とした。

「待てよ。他の客にはタダで振り撒いてるじゃないか、スマイルは0円が基本だぜ？」

「そんな基本知らないわよ。客にはサービスよ」

「だから、俺も客だろ？」

沙羅は、心底驚いたと言う顔をした。

「は？冗談？あんたはただの金食い虫でしょうが」  
「か、金食い虫？依頼料6：4で分けてやってんのに……」

しかも、沙羅が6だ。

「当然でしょ、あたしが仲介しなきゃあんた仕事出来ないんだから。4でも多いくらいよ」

沙羅はさも当然という様にそう言つて、偉そうにふんぞり返つた。

このいけ好かない女は無道沙羅むどうさらか、この喫茶『無道』でその筋の奴の仕事の仲介人をやっている。

仲介人とは名前の通りの意味で、鴉の様なその筋の奴への仕事を仲介する奴らのことだ。

大きな組織に所属していない限り、大抵の奴は仲介人のお世話になつている。

こういう仕事をする奴らは、自分の仕事は上手いが仕事自体を見つけられないという様な奴らが多いからだ。また、そういう奴らはほぼ例外なく仕事料の交渉も極め

て下手だと言え、依頼側との面倒なやり取りもしたがない。

それにだいたいの場合、依頼側も昔からの信用がある仲介人に仕事を持っていくので、仕事をする奴に直接依頼することなど異例中の異例なのである。

仕事を見つげるため、まともな仕事料を貰うため、面倒なやりとりを無くすため、仲介人にお世話になるのである。

そう言う意味では、沙羅は優秀な仲介人と言えた。

高額で割の良い仕事を何処からか見つけてくるし、依頼側方面に太いパイプも持っている。

何より、依頼料の交渉の仕方が上手い。通常の数倍の値段を吹っ掛けても相手を納得させてしまう舌があるのだ。

十数人単位の仲介を掛け持ち出来るだけの腕があつた。

だが、今は沙羅が仲介をやっているのは鴉だけである。それもそのはずで、この女は仲介人なのに取り分が命

を賭ける俺達より高いのだ。

常識じゃ考えられない事である。

普通はもつとマシな奴に仲介人を頼む。だが、とある理由があつて鴉は他の仲介人には総スカンを食らつていた。

かと言つて、自分で仕事を採すなんて長年のコネがないこの世界で出来るわけが無い。

結果、鴉はこの女の横暴に甘んじるしかなかつた。

そう、例え小娘であつても。

偉そうにふんぞり返っている沙羅を眺める。なかなか年帯びた雰囲気を持つているが、その顔にはまだ若さが溢れている。

沙羅はまだ十九歳だつた。高校を卒業したばかり、すでに二十六年間の月日を過ごした鴉にとっては小娘以外の何者でもなかつた。

何故こんな小娘がこんな仕事の仲介人なんぞをやっているのか？それは二ヶ月前に遡る。

二ヶ月前の事だ。強欲の塊、守銭奴の代表、殺しても

死なないような婆が六十二歳という若さ？でこの世を去つた。婆さんの遺書に書かれていた事もあり、若い孫娘が無理やり仲介人の後を継がされた。

当初、若い娘という事で鴉も多少喜んでた。これで仕事にも花が出来て、少しは楽しめるようになるかなと。だが、それは大きな勘違いだつた。

確かに若い娘で、美人の類に入るものではあつた。が、その娘は婆さんに負けず劣らず強欲で、しかも毒舌家だつた。

変わった当時は、婆さんの方がまだマシだつたと何度も思つたものである。

ま、人生なんてそんなものだ。

「いいじゃねえか、スマイルくれよ。いつもコーヒー頼んでるだろ？年配者の言うことは素直に聞くもんだぜ」

沙羅は眉をピクリと動かし、表情だけで「いい度胸ね」と語つた。

「そんな大口叩くのはね。コイツを見てから言いなさ

いよー」

沙羅が珍しく怒鳴り、TVの電源を入れた。NHK(日本協会放送、TV局の中で唯一受信料を取り立てに来る事で有名。最近、幹部や取締役の不祥事が発覚し受信料を払って貰えなくなつて困っている。)でニュースをやっている。内容はこうだ。

『先日深夜に、センター街で爆発事故が起きました。某大手電気会社のビルで窓ガラスが吹き飛ぶ程の爆発事故が起こつたようです。警察は欠陥工事によるガス漏れが原因として調査を進めています。また、目撃者の証言によると、爆発が起こつた時に黒い服を着た男性が落ちてきたとの情報も…え？は、はい。申し訳ありません、訂正します。黒い服を着た男性が落ちてきたなどという証言はありませんでした。重ねて、お詫び申し上げます。次のニュースです。いよいよ世界規模の美術館のオープンが……』

アナウンサーがそこまで言った所で、沙羅はTVの電源を切つた。

「……」

「……バレバレだな」

と、軽く言うのと、沙羅は凄いい形相で俺を睨み付けてきた。

「これでも精一杯だったのよ！誰の所為でこうなつたと思つてんの？何で下見でこんな騒ぎを起こすわけ？それに爆発だけなら欠陥工事でいけるからまだしも、何で姿まで見られてるわけ？馬鹿なの？素人？●▲■は付いてるわけ？」

「いや、ニュートンがな……」

鴉は、姿を見られた原因は二世紀以上前に死んだ物理学者のとある発見のせいであると説明しようとしたが、続く言葉は沙羅の怒鳴り声に遮られた。

「口答えは無し！たつたコレだけでも揉み消すのには大分金がかかつたんだから、依頼量は7.3よ」

勿論、沙羅が7なのである。鴉は焦つた。

「ちよつと待てよ。4でも十分キツイのに、3？そりや、無いぜ」



「で、客なんでしょ？何か注文ある？」

普通に無視されてしまった。

「いや、だから……」

「ご注文は？」

どうやら、諦めるしかないようである。

鴉は軽く溜息を付いた。

「コーヒー」

「はい」

ドンツと目の前にポットが置かれる。続けて、カップとインスタントコーヒーの素が置かれた。お湯で直接溶かして飲むタイプだ。

「セルフサービスです」

堂々と、沙羅は言う。

「……」

ここまで来ると感服してしまう。

黙って、鴉は自分でコーヒーを作って飲む。インスタントの味がした。

「で、結局何しに来たのよ？まさか、本当にコーヒー

飲みに来たわけじゃないんでしょ？」

当然だ。こんなインスタントを味合う為に、ノコノコと毒舌を浴びせられに来るはずがない。

だが、その言葉を言うにはこの前の展開からでかなりの覚悟がいる。

しかし、鴉も並の男ではない。堂々と说つてのけた。

「ああ、実はな。依頼料、前借り出来ないかと思つてな」

店中の音が、水を打ったように静まり返る。

その場の空気が一瞬にして凍つていくのが分かった。やはり、失言だったか。

「あんた、どの口でそんな言葉を述べてるわけ？」

「この口でだな」

飄々と说つてのける。

沙羅は怒りを通り越して呆れ返っているようだ。汚物を見るような目でこつちを見てくる。

無理だと理解しつつも、鴉は懇願するように言った。

「頼む、さつき腕の修理してもう完全にオケラ状態な

んだ。このままじゃ餓死する」

「知らないわよ。勝手に餓死すれば？」

冷酷に言い放ち、『死ぬばいいのに』と目だけで語ってくる。

うーむ、やはり駄目か。

「分かった。じゃあ、すぐに片付けられる仕事くれ。それ、お前の仕事だろ？」

「……」

沙羅は目だけでじつくりと俺を罵倒した後、カウンターの下を何やら漁りだした。

「ホラッ、仕事」

そう言われて沙羅から貰った仕事は、細長い竹で出来た棒にその枝を沢山付けた物だった。

まるで、竹箒のようにも見える。

鴉は「ふむ」とちよつとその物の用途を考えた後、真面目に聞いた。

「分からん、用途は？」

「はあ？箒を掃除以外の何に使うっていうのよ？いい

から店の前を掃いてきてよ。ホラッ、ポーつとしない。さっさと行く」

そう言つて、沙羅はパンパンと手を叩く。

一瞬、箒をへし折ろうかと思つた。しかし、一応聞いておく。

「時給は？」

「二百五十五円」

まるで、何処かの超常現象を相手にする助手の時給の様な金額だった。今度は、間違いなく箒をへし折つた。

「職、探してくる」

「はいはい、ご勝手に。その箒代も弁償してね」

その言葉はとりあえず無視し、新たなタバコを口に啣えて鴉は喫茶『無道』を後にした。

\*

今が昼か夜か、ここが地上か地下かもよく分からない。そんな窓も付いていない様な部屋で、一人の老人が書

類と睨めっこして唸っていた。

「ここ数日、道神ミチガミはずっと悩んでいるのである。

先日あつさりと殺された馬鹿の代わりが、どうも間に合いません。

「かと言って、相手はあの鴉だ。今居る手駒では何人置いた所で時間稼ぎさえ出来ん」

軽く髭をいじりながら溜息を付く。

自分が事を終わらせる前に鴉に乱入されるのはマズい。絶対に鴉を足止めさせる奴が要る。が、本国から使える手駒が来るまで待つ時間も無いのだ。

「あの様子では、そう長くはもたないだろうからな。生きているうちに持ち帰らねば、あんな物、塵ほどの価値も無い」

それ以前に、すでに偵察に来るぐらいだから鴉の決行日はどう考えても数日中だ。こつちがモタモタしている間に、鴉に掠め取られてしまつては全く意味が無い。

道神は髭を掻き塗った。

そもそも、ただの飾りにしかならんあんな物を、死に際に欲しがる馬鹿が居なければこんな悩みも無いのだ。

「忌々しい老い耄れめ………と、言える義理でもなかったな」

自分も十分に老い耄れと呼べる年だった事を思い出し、道神は少し自嘲する。

と、部屋の扉が開いた。部下が報告に入つて来たようだ。

「老師、頼まれたように調べてみたのですが、条件に合うと思われるフリーの仕事屋が丁度日本に來ているようです」

少し目を見開き、驚きを表す。

意外だった。駄目元で調べさせたのだが、そんなに都合よく条件に合う奴が日本に居るとは思つてもいなかったのである。

ちなみに、条件とは『鴉と張り合えるだけの腕がある』という物だ。

そんなに腕の良い奴は大体フリーでは無いし、しかも

丁度日本に居るとなるととんでもない確率だ。だが、まあいい。今はその幸運に感謝しよう。

「どいつだ？」

道神は部下から渡された資料を覗き込み、顔を顰めた。

「よりにもよって、コイツか……」

その資料に載っていた人物は、この業界では異色の人物として有名な男だった。

いや、異色なんぞという生易しい表現では不適合である。

分かりやすく言えば、天才<sup>バカ</sup>である。いや、この言葉で

さえ不適合だ。

道神は、この男の事を簡潔にまとめるのを諦めた。

「で、連絡はいつ取れる？」

この男を使うとなると、噂どおりならば盛大に大嘘を付かねばならないが……背に腹は変えられない。

そうして、道神は今まで付いた事の無いような大嘘を付く覚悟を決めたのだった。

\*

住宅街からやや離れた寂れた場所には、住宅街にあつては困るものが集められている場合が多い。

ゴミ処理場。工場。発電所。線路などである。

理由としては、悪臭、騒音、事故時の安全性などが上げられる。

これらの物を住宅街に持ち込んだのでは、安心して暮らせないし、悪臭や騒音にいたつては日々の暮らしにすら影響が出る。

だから、それら周辺は人気が無く、結果として住宅街から離れた場所になるのである。

だが、得てしてそのような場所は地価や家賃が安いのだ。

だから、その安さの魅力に惹かれて住みにくいその場所に住む人も多い。

鴉も、そんな一人であった。

「あー……」

暑い、という言葉が最後まで口から発声されずに消える。あまりの暑さに、そんな気力すら残っていない。

今は夏だ。左の義腕が、腹立たしいほどの熱を帯びて鴉を苦しめていた。

ガタンゴトンという電車の音が、部屋全体を震えさせる。

手が届くどころか若干鉄橋と建物が接触しているので、電車が通るたびにダイレクトに振動が伝わってくるのだ。

鴉は、今は二階建ての古い建物をねぐらにしている。

それは外から見ると廃墟にしか見えぬ、NKH（日本協会放送）の集金すら来たことが無かった。

そのNKHのニュースが、テレビから聞こえてくる。

『今日、午前10時半頃、新東京国際空港玄関前で、外国人男性が銃刀法違反の疑いで逮捕されました。男性は二本の日本刀をベルトに差したまま税関を通過したようで、一体どのような方法で通過したのか近くの警察

署に連行して尋問していたのですが、今日の午後一時頃、男は警察署から脱走したようです。依然、男の捜索が続いています。今から表示する地域と、その周辺に住む人は十分注意してください。男性の格好ですが……』

何か気になることを言っているような気がするが、電車の音がうるさくてよく聞こえない。

と、唐突にテレビの画面が消えた。

鴉は舌打ちして、リモコンをテレビに投げつける。

しかし、その画面に再び映像が浮かび上がる事は無い。すでに役目を終えていたのだ。

「クソツ、ポンコツが！」

テレビを罵る。いや、本当はもっと別の奴に罵る。

あまりの不当さに、鴉は憤慨しているのだ。世の中に。

「仕事がねえ……日本が不景気するのは本当だったんだなあ、クソツ！」

仕事を探すは探してみたのだが、鴉は良い仕事を見つけてる事が出来なかったのだ。

『二・三日だけ突然働く事が出来てなお且つ高収入、

それでいて楽な仕事』を探したのだから当たり前である。  
この不景気のご時世で無くとも、そんな都合の良い仕事があるはずも無い。

「……タルイ」

実際、鴉はヤバイ状況だった。

財布の中身は悲しいくらいに涼しい状態で、既に材料である皮の重みしか残っていない。

カップ麺すら買えない状況である。

いよいよヤバイな、と真剣に思った時、鴉は大通りの道路脇に立っていた登りを思い出した。

確か予備校の登りで、『講師募集』と書いてあったような気がする。

ぼんやりと、鴉は過去を振り返る。

そういえば、随分昔の潜入を必要とした依頼の時に教員免許（勿論、偽造）を取得していた。

ちなみに、英語教師だ（職業柄英語は話せるので）。

「これも何かの縁か」

そう呟いて、鴉は立ち上がった。

\*

大分痛んだ免許を持って、募集の登りを立てていた予備校も受付へ鴉は向かう。

入ると、メガネをかけ、知的そうなスーツ姿の受付の姉ちゃんが対応してくれた。

「表の「講師募集」の昇りみて来たんですけど」

普段の鴉としては随分抑えた口調で言う。印象が肝心なのである。

「え？講師、ですか？教えられる教科は？」

受付の姉ちゃんは、ちよつとキョトンとした顔をして尋ねてきた。どうも自分は教育者顔じゃないらしい。

整形するわけにもいかんしなあと思いつつながら、鴉は答える。

「英語です」

「英語、ですか？……えーと、今、英語講師に空きはありませんね」

受付の姉ちゃんは手元のパソコンを操作しながらそう言ってくる。パソコンで確認しているようだ。

「あー、空き無いですか。やつば空き無いと駄目ですかね？」

「そうですね、駄目ですね」

そう言って笑っている。そんな事分かるだろ？という顔だ。

と、後ろの方で何やら会話が聞こえた。

「橋本先生く、お疲れ様です」

「おう、吉田。お疲れ、お前も気を付けて帰るんだぞ」

「はい、橋本先生こそお気を付けて」

「何言ってやがる。俺は空手三段だぞ？大丈夫だよ」

「いえいえ、帰りに飲み過ぎて倒れたりしないようにって事ですよ」

「はっはっは、大丈夫だ。先生はザルだ」

どうやら、生徒と講師の様だ。俺は講師の方を指差して尋ねた。

「あの人も講師でしょ？教科は何ですかね？」

「え、多分英語だと思えますけど……」

「へえ」

再度、確認する。

「空きがあれば、雇ってもらえるんですよね？」

「ええ、空きがあれば。まあ、事故とか何か緊急の用事が出来ない和无理でしょうけど」

しつこい人だな、という感じで受付の姉ちゃんは答えた。

「ほお、事故とか緊急の用事ねえ」

鴉は予備校から出て行く橋本先生を見つめ、ニヤリと笑った。

\*

授業が始まったというのに、教室は相変わらず喧騒に包まれていた。

それもそのハズだろう。本来入ってくるはずの橋本先生の代わりに、見た事も無い男が入って来たのだから。

「えー、今日からしばらく橋本先生の代わり英語を教えるようになったからずまたらう鳥丸太郎です」

鴉はその場で考えた適当な名前で名乗った。酷いネーミングセンスだ。

教室が、ザワザワとより騒がしくなる。

「橋本先生、昨日元気だったろ？」

「うん、昨日挨拶した」

「俺、先生に金貸したままなんだけど」

そんな感じで、好き勝手に話し出した。

鴉はパンパンと手を叩いて、注目を集める。

「ほら、早速始めるから、静かにしろ」

代わりで入った先生としては、随分横柄な態度である。

名前を言っただけで、自己紹介も何もしない。

生徒の一人が手を上げて質問した。

「橋本先生はどうしたんですか？」

ん？その理由は考えてなかったな、うーん。まさか、簀巻きにして監禁してるので。とは言えないからなあ。

「えー、橋本先生は産休です」

やはり、適当に答えた。教室がざわめく。

「あの、橋本先生は男なんですけど？」

あ、そう言えばそうだったな。まあ、男でも根性だしや産めるだろ、多分。そういや昔、男が赤ん坊を産むって話があったなあ、確かBABY……だったか？

「はい、教科書開いて」

そんな事を考えながらその生徒の質問を無視し、授業を始めた。

とても酷い出来栄だったのは、もはや言うまでも無いだろう。授業後に予備校側に文句を言おうとした生徒を何人か黙らせる羽目になった。

まあとにかく、決行日までの数日間を鴉はどうかこうにか食いつなぐ事が出来た。

\*

クオンエン  
道神は、何かをやり遂げた後の爽快感の様な物を久



しぶりに感じていた。

ホツと溜息を吐く。まだ、背筋がむず痒くて仕方がなかった。

それもその筈だろう。職業柄嘘を付く事も多々あるが、アレほどまでに根も葉もない大嘘を付いたのは初めてだったからである。しかも面を保つのに、随分苦労した。

「しかし、依頼料すら受け取らんとはな」

あんな馬鹿馬鹿しい話を大真面目に信じ、正義の仕事に報酬は要らないと依頼料も受取らないとは、馬鹿ここに極まりである。

「馬鹿とハサミは使いようとは、まさにこの事だな」

そう、今更ながら呆れた顔で呟く。近くに居た部下も同じ意見の様で、道神の言葉に頷いていた。

話した内容が適當すぎた気がしたが、まあよからう。

「ま、ともかく鴉への足止めは出来たわけだ。メデタ

シとしておこう」

そう言って、道神はニヤリと笑った。